

## 卓越大学院プログラム 事後評価結果

機関名	東京農工大学	整理番号	1806
プログラム名称	「超スマート社会」を新産業創出とダイバーシティにより牽引する卓越リーダーの養成		
プログラム責任者	三沢 和彦	プログラムコーディネーター	大津 直子

### 卓越大学院プログラム委員会における評価

<p><b>【総括評価】</b></p> <p>A：計画どおりの取組が行われ、成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。</p>
<p><b>【コメント】</b></p> <p>卓越した学位プログラム、「知のプロフェッショナル」を養成する体制等の構築については、農工の融合領域で、新産業創生の基盤構築を目的として、国内外の機関との連携により学生に新しい学びの場を与え、数多くの研究発表や新事業創出などの成果が得られている。中間評価時の指摘を踏まえ、新産業創出をビジョンとして位置づけ、そのマイルストーンを実現することを目的とすることに再定義したことで、取り組みの意義が、学生、学外の双方から分かりやすくなった。</p> <p>修了者の成長については、学生が異分野との交流に新しい価値を見出し、ダイバーシティの教育を正しく受け、従来に比べ、俯瞰力や独創力、高度な専門性が向上している事例が数多くみられた。一方で、申請時に中心的な取組として説明していた女性研究者に対する支援の強化については、その取組がどのように反映したかが、もともと女性研究者の多い本大学の中では、成果として見えにくい部分もあった。補助金による学生に対する経済支援は、研究費の支援のみで、生活支援を行わないにもかかわらず、一定数の学生を確保できていることはひとつの考え方として理解できる。今後は、学内資源や他の支援制度等も活用して、さらなる支援の充実を期待したい。</p> <p>キャリアパスの構築については、卓越リーダー養成機構による独立した新しい基準での評価体制で、ポートフォリオシステムにより可視化して学生にフィードバックする仕組みは大変有効である。その評価基準において、学位論文の審査母体や、KPIの明記、客観性、国際的な水準の担保などに対して、中間評価時から改善が見られるが、大学院全体としてこれらの指標をとりまとめて、集計し、説明する部分で不十分な点があったことは残念である。</p> <p>大学院全体への波及効果及び事業の継続・発展については、今回のプログラムをパイロットプランとして、今後、大学院全体に展開するという構想は理解できる。今回の取組のグッドプラクティスは何かをいま一度振り返り、学位プログラムを継続する中で、具体的な施策として大学院全体に展開することが望ましい。当面は、外部研究資金や他制度の財源によるところの大きい資金面について、第三者を含めた評価委員会による経理執行の監査等のPDCAサイクルを正しく機能させつつ、学内資源等の持続可能な財源による自立した取組への計画的な移行に期待したい。</p>